

うしお

第 65 号

36,930

目 次

ブリ採捕試験並びに稚魚蓄養管理報告	調 査 部	1
蓄養稚ブリ（ハマチ）の餌料効果比較試験	調 査 部	13
漁況月報（7・8月分）	漁 業 部	21
6・7月のマグロ延縄漁況	漁 業 部	25
定置観測（8月分）	養 殖 部 東 邦 彦	29
普及員だより	佐藤友憲 入枝茂樹	31 32
奄美短信	大島分場	34
各部の動き	編 集 部	35
分場の動き	大島分場	41
養魚場の動き	大口養魚場	42
各種会議開催お知らせ	編 集 部	44

鹿児島市塩屋町十八番地の七

鹿児島県水産試験場

ブリ採捕試験並びに稚魚蓄養管理報告

調査部

34年度からの継続事業として実施した。

※期間 昭和36年5月3日～6月26日

※方法

試験船 かもめ / 5ton 60HP

根拠地 山川港

漁具 抄網(3×3mクレモナもじ網)を主として使用。6月上旬、魚体の成長に伴つて抄網では採捕困難となつたため、しいら旋網を改造して、小型旋網を作製(牛根漁業協同組合より借用)したが、本格的操業を実施することができなかつた。なお、船の舷側より曳航する型式の採捕網も作製したが、試験の結果、網口の開口不充分、風波のたかいときの操業困難等の理由で、十分に使用できなかつた。

採捕 従来どおり、先づ潮目を発見すべく航走し潮目にある流れ藻と共にブリ仔を採捕した。採捕したブリ仔は流れ藻と共に直ちに甲板上に引上げて、ブリ仔だけを船の活魚槽(容積1.9m³)に入れて活かした。なお、今年度は撒き餌(こませ)として冷凍アミ(ホンアミ—東串良で漁獲されたもの)を使用してブリ仔の集魚を試みた。

稚魚管理 船で沖から根拠地の山川港に運搬したブリ仔は選別して一間立方、又は2間立方のクレモナもじ網(8×8、90径或は10×10、30径)の生簀網で蓄養した。1～2週間、蓄養したブリ仔は計数、計量の上蓄養業者に売渡した。

選別：次のような2個の選別網を作製して、先づ網目の小さい①の選別網を上記の生網の中に浮かべ更に①選別網の中に網目のやゝ大きな②の選別網を浮かべた。船の活魚槽からブリ仔をたも網で抄い乍ら選別網②の中に入れて、自然に小さなブリ仔が選別網を抜けて、外側の大きな網の中に泳ぎ出すようにした。

従つて、魚体は3段階に選別されたわけである。

(②の選別網に残る大きな魚群、①の選別網に残る中大の魚群、①の選別網を抜けて、生網の方へ泳ぎ出した小さな魚群)

①選別網……………網目：クレモナ16本無結節18節
 大きさ：縦80cm横80cm深さ85cm

②選別網……………網目：クレモナ16本無結節12節
 大きさ：縦120cm横120cm

深さ100cm

投餌 餌としては、冷凍アジ又はカタクチを摺り餌として用いた。1日の投餌量は大体魚体量の30~40%程度を見当とし、7時から18時まで2~3時間おきに6回に分けて投与した。(毎回できるだけ飽食する程度とした。)

参加担当者

調査部長	別府 義輝
水産技師	塩田 正人 (漁業部)
“	九万田 一己 (調査部)
“	宮田 幸藏 (“)
水産技師補	上田 忠男 (“)
“	荒牧 孝行 (“)

試験船かもめ 杜山光二船長 外8名

調査結果と考察

○試験船の行動・漁況・稚魚管理の毎日の記録は略す。

○流れ藻・ブリ仔の出現・採捕。

旬別の結果は別図のとおりである。

流れ藻：今年度は全般的に少なく、従つて流れ藻の探索だけに終る日も多かつた。特に従来、主漁場となつていた佐多岬東方10～15 附近海域（辺塚～観音崎沖）は5月15日頃まで極めて少なく、中旬後半からかなり見られ始めた。

鹿児島湾口附近では立目崎～佐多岬周辺開闢岳S沖にやゝ多く、種子島北西沿岸では馬毛島周辺より種子島浦田沖にやゝ見られた。

6月上旬、南薩沿岸には少なかつたが、海峡中瀬～串木野、沖小島周辺にかけては、かなり大きな流れ藻があつた。（調査当日、S Wの風波たかく操業できなかつた。

ブリ仔：旬別採捕量は次のとおり。総数約34,350尾

5月上旬（5日操業）約22,600尾 2～10cm
（1～2g、3～5cm多し）

中旬（6日操業）約7,150尾 2～12cm
（1～2g、3～5cm多し）

下旬（6日操業）約3,670尾 3～12cm
（12g平均、10cm内外多し）

6月上旬（6日操業）約900尾 5～7cm内外

中旬（3日操業）約30尾 10cm内外

下旬（2日操業）0（流れ藻極めて少なし）

即ち、抄網による採捕量は旬を追つて急減の傾向がみられ、34年、35年に比べてブリ仔の出現時期が早かつたのではないかと思われる。（34年、

35年共に5月中旬が盛漁期であつた)併し乍ら、5月中旬竹島N6湮と、6月上旬枕崎S田5~6湮では、流れ藻に10%大のブリ仔が多数ついていたけれども、抄網では採捕することができず旋網使用の必要性が痛感された。

流れ藻の出現とブリ仔の出現状況は必ずしも正の相関を示さず、観音崎沖では5月下旬以降かなりの流れ藻が出現していたにも拘らず、ブリ仔は殆んどみられなかつた。34年、35年には辺塚~観音崎沖一帯は主漁場を形成した海域であつて流れ藻の出現とブリ仔の出現は總体的にみて正の相関を示していた。従つて今年の当海域は特異な状態で黒潮流(分派)と関係があるのではないかと思われるが、詳細については後日検討したい。(調査時、表面水温の観測を実施したが、調査範囲が狭小にすぎて表面水温だけからそれらの関係を究明することは極めて困難である)

調査海域の表面水温は5月上旬~下旬18.5~22.0°C
6月上旬~下旬21.6~25.2°Cであつた。

集魚用として今年度、初めて試みた冷凍アミの撒き餌は3~5%程度の小さな魚体に対しては効果は期待できないが、10~12%程度(あるいはこれ以上)のものに対してはかなりの効果が認められるようである。併し乍ら、冷凍アミの鮮度保持については考慮しなければならない。特にアミ漁獲后完全凍結に至るまでの間の取扱は留意する必要がある。

1) 魚体が小型(体長3~7cm)のときは、3×3m位の簡単な抄網でもかなり採捕することができるが、魚体が中~大型(体長10~12cm)とな

ると旋網を使用する必要がある。即ち抄網、旋網を併用すべきである。

2) ブリ採捕は一応流れ藻を対象とし、それに附随するブリ仔を採捕すると言う形態であるので、流れ藻とブリ仔の出現が一致しなければ成立し難い。従つて、ブリ仔が流れ藻につく機構（ブリ仔の浮游と海潮流、流れ藻の浮上・浮游と海潮流、ブリ仔の流れ藻に対する撰択性等）の究明が必要である。

3) 採捕に重点を置くこと、船の調査範囲（1日の）が極めて狭小な範囲に制約されることなどのために、結果的には従来の主漁場に調査の勢力を集中して広範囲（南薩、列島周辺、種子島東方、屋久島周辺海域等）の漁場探索ができなかつた。この対策として、各地の曳縄漁船からの漁況、流れ藻出現等の情報を蒐集して敏速な探索漁場の移動を行うことが必要である。（6月上旬南薩、海峡調査の折、片浦根拠の曳縄漁船乗組員から、5月中旬津倉、高島周辺海域にかなりの流れ藻とブリ仔らしき稚魚の多数游泳が見られたことを聞いた。）

4) 流れ藻、ブリ仔の出現は日変化が著しいので、ブリ仔の多量出現の際にはできる限り採捕して需要にこたえるべきである。併し乍らこの問題も船の活魚槽の許容量に制約される。（5月7日約12,000~15,000尾採捕の際は、より以上に採捕することは可能であつたが活魚槽に満杯のためやむなく採捕を中止した）従つて採捕した魚の多量活魚輸送についても考慮しなければならない。

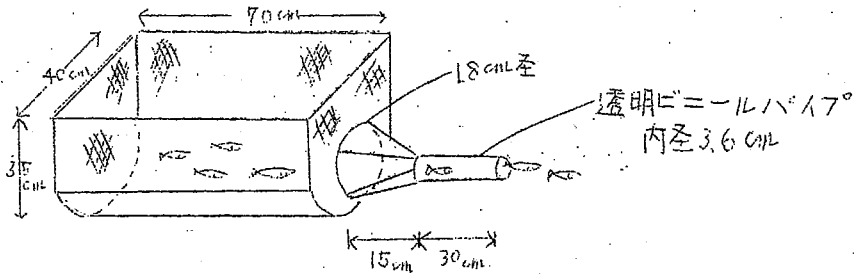
稚魚管理

前年度、尾数測定、計量、選別等の方法に不備な点が多く、又、その回数が余りにも頻繁となつてブリ仔の多量斃死を惹起する一因ともなつたように思われたので、今年は魚に無理をせず丁寧に取扱うことを主眼として管理を行つた。結果は極めて良好で出荷後の生育状況も順調である。

先づ選別の方法は前述のとおりで、結果としては魚体を傷けることも少なくスムーズに選別できた。

又、計数について、出荷時全重量を測定し、その中から150～200尾の平均体重を求めて総尾数の推定を行つたのであつたが、後では次のような尾数覚定籠を作つて、透明なビニールパイプから生簀網に泳ぎ出して行くとき数取器を使用して測定することとした結果極めて良好な結果を得た。

尾数測定籠（別府考案）



採捕して管理地の山川までの輸送時歩減りは極めて少なかつた。（時たま船の活魚槽内で共喰いが見られることがあつた。）

山川での蓄養管理期間の歩減りは34,350尾－29,845尾（出荷）÷34,350尾（採捕受入）は約13.2%であつた。

これは共喰いが殆んどで斃死は少なかつた。

○ブリ仔の受入、出荷、餌料の使用状況（旬別）は次のとおり。

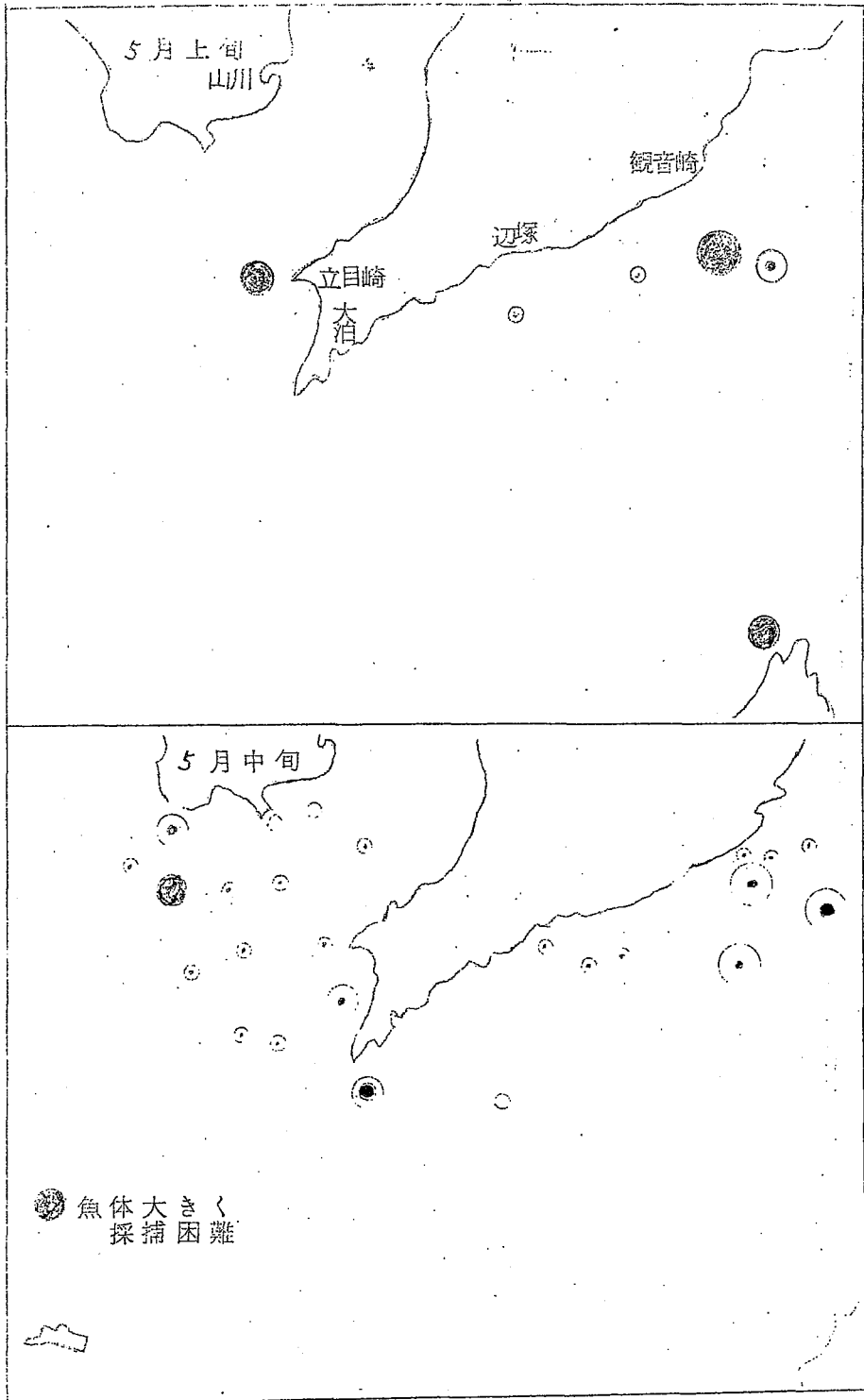
旬	ブリ						減	餌料使用量 (餌料試験除く)	
	受入	出		荷					
5月上	尾 22,600							旬別 には 不明	アタカクチ 35,3 Kg
中	7,150	日	出荷先	総重量	1尾平均重量	尾数(推定)	アツ		
		19日	牛根	19,346Kg	7,3g	2,650	317,4		
下	3,670	23日	"	34,200	9,0	3,800	349,6		
		28日	"	107,100	7,0	15,300			
6月上	900	2日	海瀉	31,050	23,0	1,350	76,15		
		4日	"	31,500	7,0	4,500			
中	30							57,25	
下	0	25日	山川	43410	19,3	2,245	59,80		
計	尾 34,350			Kg 266,605			尾 4,505	Kg 886,5	

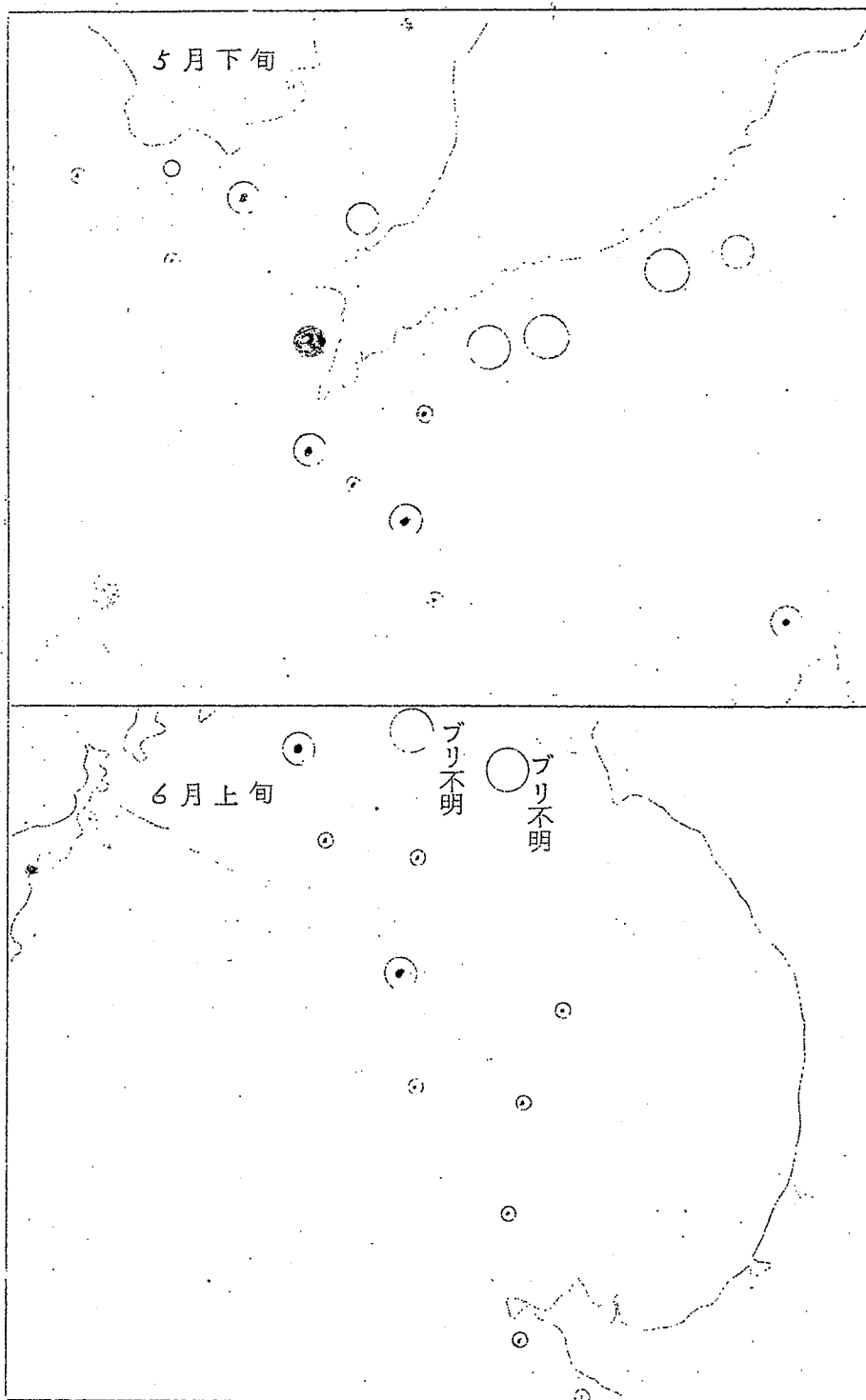
1
7
1

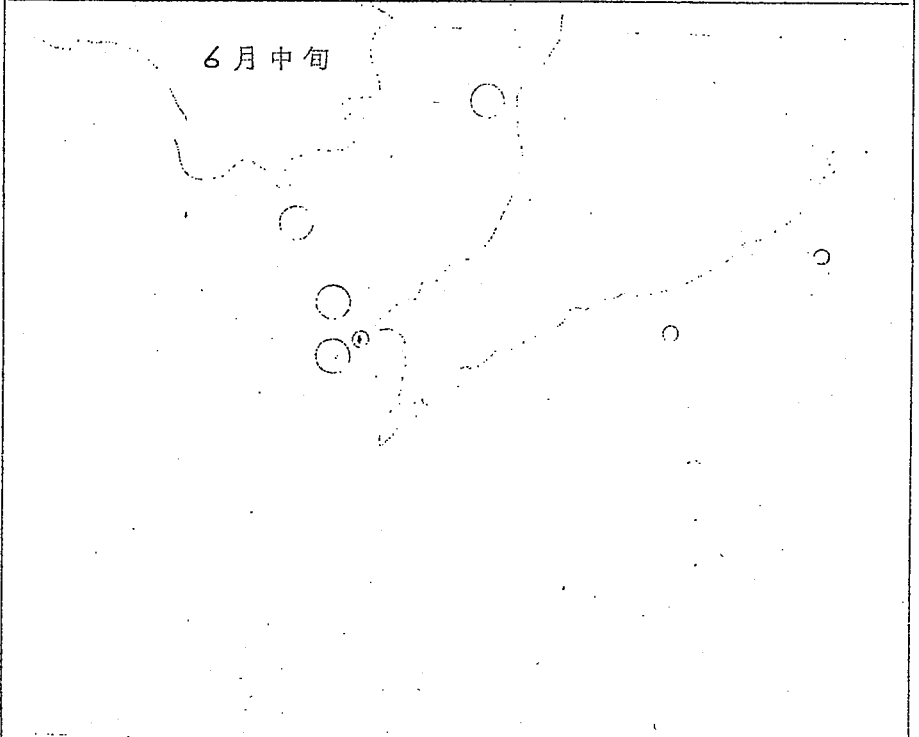
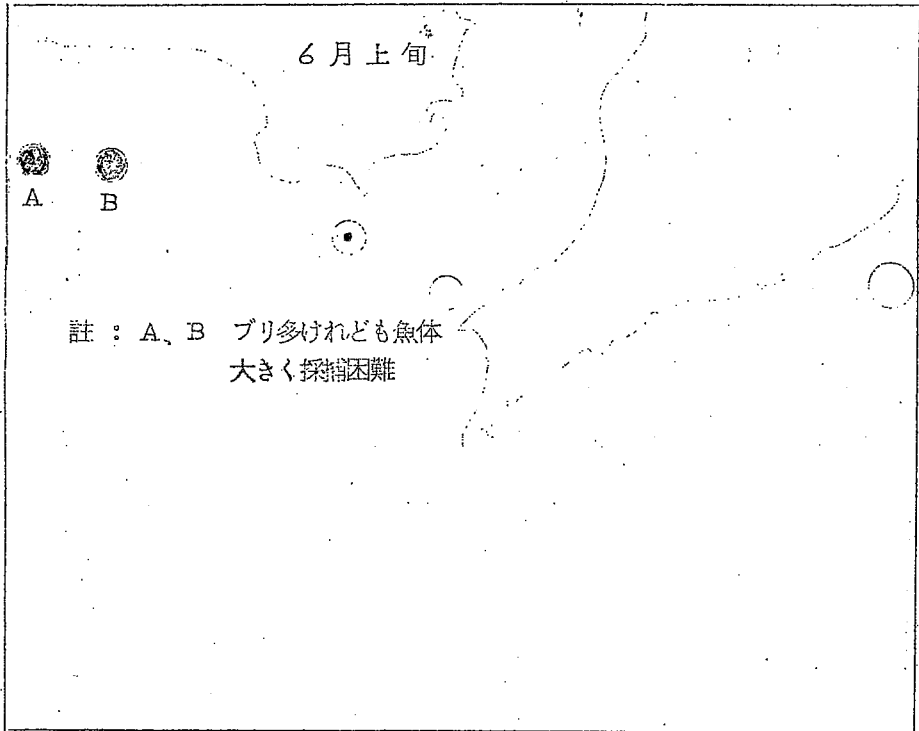
今年の稚魚管理を通じて問題点として考えられることは

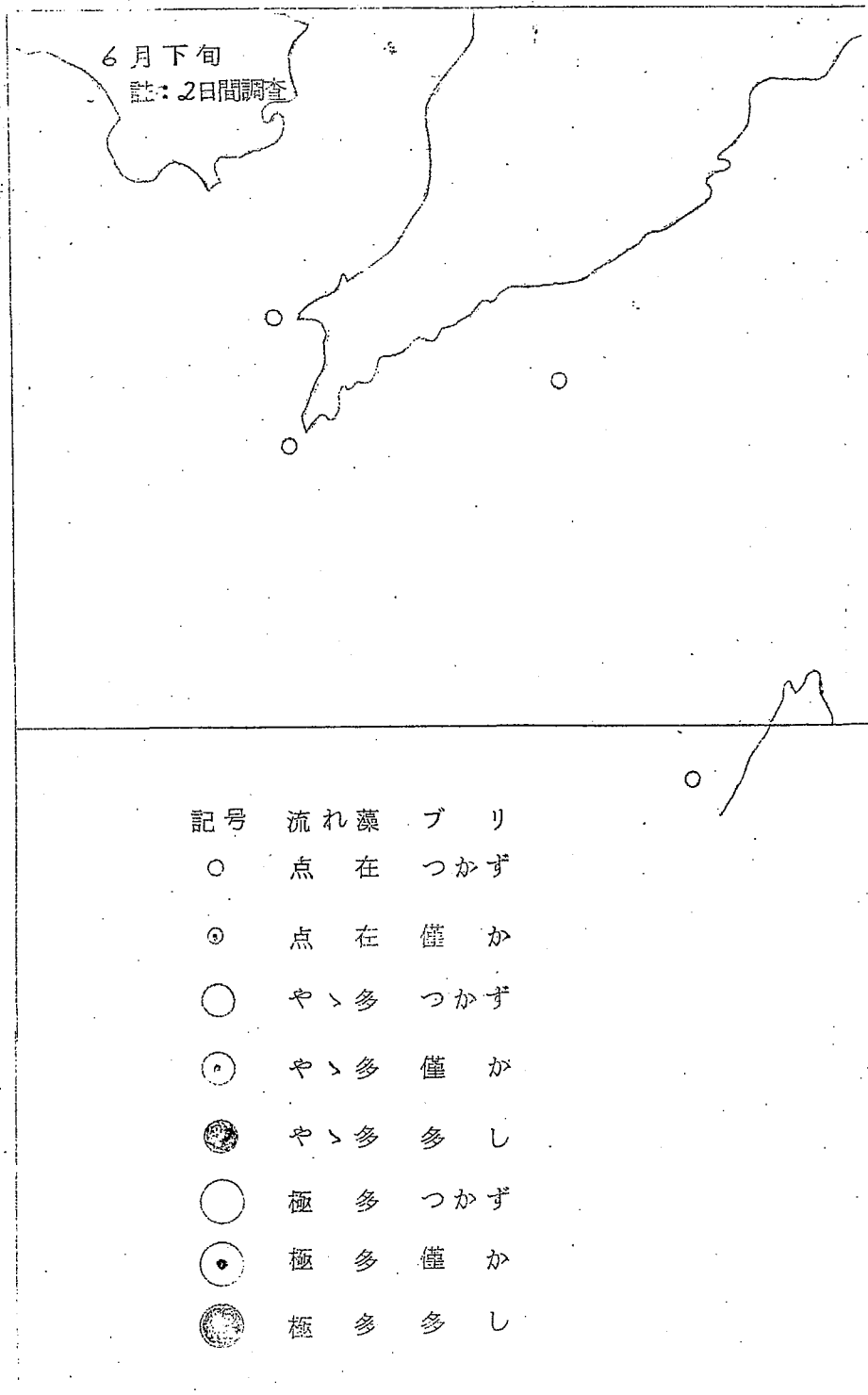
- 1) 最小型魚の選別をもう1段階行う必要があるようである。前述の選別網①②では、大体体長100mm以上、5～100mm、50mm以下の3段階に分けられるが、50mm以下のものを3～50mmのものと、30mm以下のものに分けた方がよい。50mm以下の小型魚では、体長の大きな差はなくてもかなり共喰があるようで、30mm以下のものだけ別の蓄養網に入れれば生育の不揃いもなく、充分種苗としても使えると考えられる。
- 2) 投餌方法を再検討して適切な方法を講ずべきである。現在の方法でも特に障害を来す程のことは全然ないが、ミンチ餌投与の際の流出によるロス、不断摂餌の方法
今年度網地で作製した餌籠をして試みたが結果は悪かった。等は考慮しなければならない。
- 3) 健全な種苗生産のための餌料についても考慮すべき余地がある。冷凍鮮魚肉以外の餌、ビタミン剤、ミネラル、抗生物質、クロレラ等の混合利用、プランクトン(動物性)の利用等……………があげられる。

(文責 九万田一己)









蓄養稚ブリ（ハマチ）の餌料効果比較試験

調 査 部

蓄養ハマチは採捕したあと、はやく餌づけすることで共喰や斃死による減少を小さくすることが出来るが、さらに餌の種類や投餌量によつても非常に影響を受ける。そこで今回は林兼産業KKから該社製品養魚用飼料の餌量効果試験を依頼され、これにかつお内臓もあわせ、アジの肉を対照に餌料効果比較試験を行った。

試験場所 山川湾内

期 間 5月31日～6月23日

方 法

生簀網はクレモナもじ網（/K×/K×/K）を4区分設置、各々、対照区（アジ）、I区（林兼産業KKの製品フードにアジを混合）、II区（かつお内臓）、III区（フードにかつお内臓を混合）とし、アジ及びかつお内臓はミンチにかけてから投餌した。

投餌回数は1日3回、投餌量は最初総魚体重量の30%とし、3日おきに最初の投餌量の30%づつを増加していった。したがって10日後の投餌量は必ずしも総魚体重量の30%になっているとは限らない。（別紙結果表参照）

なお、林兼産業KKの製品であるフードとアジ及びかつお内臓との混合は各々の固形物が等量になるよう混合した。すなわち、アジの肉あるいはかつお内臓の固形物は25%（他は水分）フードは90%として算出した。

計算例 鮮肉重量をY、フード（粉）の重量をXとす

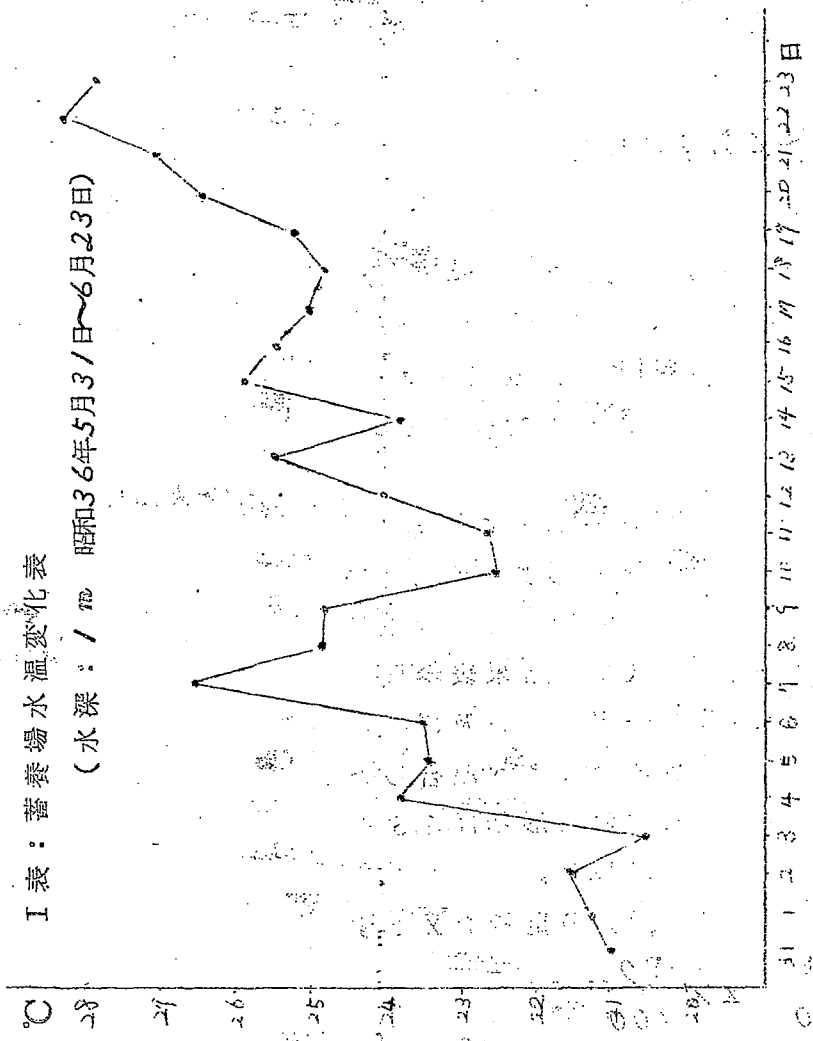
$$\text{ると。 } Y \times \frac{25}{100} = X \times \frac{90}{100}$$

$$\text{但し } Y = \text{総魚体重量} \times \frac{30}{100} \times \frac{1}{2}$$

魚体重量及び尾数測定は10日ごとに行なつた。

蓄養場所の環境（水温）

今回は水温だけ測定（水深1m）を行ない塩素量、溶存酸素の測定は行なわなかつた。5月31日より6月23日までの水温は下記のグラフの通りである。但し水温観測時間は14時であつた。



結果及び考察（餌料比較試験結果表参照）

(1) 歩留り

餌育日数は対照区からⅢ区まで20日間、Ⅳ区は15日間であつた。その歩留りはアジをミンチにかけ投餌した対照区が90.5%、フードとアジを混合したⅠ区が69.6%、かつおの内臓だけを与えたⅡ区が64.5%、かつお内臓とフードを混合したⅢ区が60.1%となり、対照区が最もよい成績を示したが、飼育日数からみれば、一般に1/1日目からの10日間は4区分とも歩留りが高くなつてゐる。

第1日目から10日間、高い減耗率を示した原因は、採捕の際キズがついたものや、あるいは実験の魚体重量及び尾数測定のため衰弱し、斃死したもの、さらに共喰いによるものと推察される。

然るにⅡ区のかつお内臓だけを餌とした稚魚は1/1日目から10日間においても高い減耗率を示した。これはかつお内臓の毒素的要素の存在に起因するものかどうか、今后究明する必要がある。（かつお内臓利用のBP飼料を雛鶏に投与した試験で雛鶏の多数斃死の例あり、卵子丸実施）

(2) 日間摂餌率と餌料転換効率

稚魚投餌量は魚体重量の30%を与えるようにしたが、第1日目から10日間は前述の通り斃死したため、日間摂餌率は高い値を示しているが、餌料の転換効率は低い。特に著しいのは、Ⅱ区のかつお内臓を投餌したもので、日間摂餌率は49.2であり、餌料転換効率はわずかに2.5の値である。

次に1/1日目から10日間は対照区及びⅠ区が日間摂餌率は約32%で同じく、餌料転換効率は2.4と最も高い値を示している。

(3) 増重倍率

増重倍率は対照区のアジを投餌したものが約3.1で最も

餌料効果比較試験結果表

飼育日数	対照区*(アジ)				I区(フード+アジ)		
	0	日 1~10	日 11~20	20日間	0	日 1~10	日 11~20
生存尾数	273	251	247	247	273	190	190
減耗尾数	—	22	4	26	—	83	0
減耗率	—	8.1	1.6	9.5	—	30.5	0
歩留り(%)	—	91.9	98.4	90.5	—	69.6	100
総魚体重量(g)	1,000	1,800	4,080	4,080	1,000	1,500	3,400
総増重量(g)	—	800	2,280	3,080	—	500	1,900
増重倍率	—	0.8	1.27	3.08	—	0.5	1.27
日間増重率	—	5.7	7.8	6.1	—	4.0	7.75
平均体重(g/尾)	3.7	7.2	16.5	16.5	3.7	8.1	17.9
平均体重増重量(g)	—	3.5	9.3	12.8	—	4.4	9.8
投餌量	—	5,250	9,450	14,700	肉 フード	2,625 729	3,938 1,094
日間摂餌率(%)	—	37.5	32.1	33.9	粉は生 に換算	42.4	32.0
餌量転換効率	—	15.2	24.3	18.0	—	9.4	24.2
増肉係数	—	6.56	4.14	4.45	粉は生 に換算	10.49	4.19

Ⅱ 区 (かつお内臓)				Ⅲ 区 (内臓+フード)				
20日間	0	日 1~10	日 11~20	20日間	0	日 1~10	日 11~15	15日間
190	273	219	176	176	509	334	306	306
83	—	54	43	97	—	175	28	203
30,5	—	19,8	24,4	35,5	—	34,4	8,4	40,0
69,6	—	80,2	80,4	64,5	—	65,6	91,6	60,1
3,400	1,000	1,130	1,900	1,900	2,240	3,250	4,450	4,450
2,400	—	130	770	900	—	1,010	1,200	2,210
2,4	—	0,13	0,68	0,9	—	0,45	0,37	0,99
5,5	—	1,22	5,1	3,1	—	3,64	6,2	4,4
17,9	3,7	5,2	10,7	10,7	4,4	9,7	14,5	14,5
14,2	—	1,5	5,5	7,0	—	5,3	4,8	10,1
6,563	—	5,250	5,933	11,183	内	5,880	2,730	8,610
1,823	—	—	—	—	フード	1,633	759	2,392
35,4	—	49,2	39,2	43,2	—	42,8	35,5	37,2
15,5	—	2,5	13,0	7,2	—	8,5	17,4	11,9
54,7	—	40,38	7,71	12,43	—	11,64	4,55	7,79

高く、次にI区、Ⅲ区、II区の順となつている。しかしこれは20日間の平均であり、1/1日目から1/0日間では対照区とI区は全く同じ値を示している。

日間摂餌率と増重倍率ではII区の第1/1日目から1/0日間は前者が49に対し0.13、1/1日目から1/0日間は前者が39に対し後者が0.7と、他の区に比べ非常に差があることである。

(4) 増肉係数

第1/1日目から1/0日間は4区分とも各々、1/1日目から1/0日目の値に比べよくなく、特にII区のかつお内臓だけは総増重量が130gしかなく、増肉係数は40.4という値を示している。Ⅲ区のかつお内臓とフードを混合した場合（但し飼育日数は1/5日）は第1/1日目から1/0日間は増肉係数の値は11.64を示し1/0日目から5日間では4.55という良い成績が出ている。しかし対照区のアジだけ、或いはアジとフードを投餌したI区が最も良い成績を示している。

(5) 餌料とその経費

今回は山川港内を根拠に採捕及び蓄養を行なつたが、山川は、かつお節製造工場が多く、その内臓が非常に豊富である。現在蓄産用飼料及び塩からわずかに肥料に利用しているだけで、これをブリ稚魚飼育に用いたら？ということからこの実験に使用した。

そこで、5月31日から6月23日まで餌料効果比較試験に要した飼料費を記す。

次の表から、餌料効果比較試験の総増重量と比べてみると、単位金額（1円）につき、増重量は対照区で11.6g、I区は9.85g、II区は11.55g、Ⅲ区は9.70gであった。

	対照区	I 区	II 区	III 区
飼育日数	20	20	20	15
投餌量 (kg)	14.7	アジ 6.57 フード 1.8	11.18	かつお内臓 8.6 フード 2.4
飼料費 / kg 当 単位円	18	アジ 18 フード 70	7	かつお内臓 7 フード 70
飼料費 (合計)	265	244	78	228

(6) 飼料の一般成分

6-1 あじ

カロリー	水分	蛋白質	炭水化物		脂質	灰分	カルシウム	磷	鉄
			糖質	繊維					
Cal	g	g	g	g	g	g	mg	mg	mg
110	75.0	20.0	0.7	—	3.0	1.3	12	200	0.7

その他の成分 (ビタミン類)

ビ タ ミ ン			
A	B ₁	B ₂	C
l. U.	mg	mg	m
40	0.15	0.08	2

6-2 かつお内臓 (昭和32年、弟子丸分析)

	水分 (乾物に対する百分率)				糖 (澱粉 として)	
	粗蛋白質	粗脂肪	粗繊維	粗灰分		
酸水解	52.0	76.8	11.0	—	7.3	0
自己消化	36.4	60.3	15.2	—	15.9	0

酸水解—ドラム缶に入れレトルト内で酸加圧分解し

たもの。

自己消化—そのまま自己消化法で分解したもの
その他の成分（ビタミン類）

	B ₁	B ₂	パントテン酸	B ₆	B ₁₂
酸水解物	3,9	13,8	79,0	11,1	19,6
自己消化物	4,2	15,3	65,8	12,0	11,2

以上2、3の点について記述したが、要約すると①アジだけミンチにかけ投餌したもの、②アジとフードを混合したもの、③かつお内臓だけのもの、④かつお内臓とフードを混合したもので実験を行なったが、歩留り、増重倍率、増肉係数、餌料転換効率では対照区のアジだけ投餌したものが最もよく、II区のかつお内臓だけ投餌したものが、最も劣っていた。またフードを混合した場合アジだけのものよりは劣っていたが、内臓だけよりも良い成績が出た。

註：(1) フードとは林兼産業KKで製造された養魚用飼料のことであり商品名ではない。

(2) アジ、かつお内臓は冷凍貯蔵したものを使用。

(3) 蓄養稚ブリは1日6～7回の投餌をしたが、この餌料実験では1日3回投餌。

(4) 飼育日数は各々15日～20日であった。

(5) 今回の実験で投餌量は最初総魚体重量の30%3日おきにさらにその30%を増加したのは、昭和35年、九万田、弟子丸は蓄養稚ブリに対する餌料効果比較試験を行ない、稚ブリに対して少なくとも1日当り魚体重量の20%投与が必要である。(うしお57号)ということから総魚体重量の30%を投餌量として試験した。

文責 荒牧孝行

※巾着網漁況

枕崎港入港の双手巾着網は延29隻146,734Kgの水揚をなしている。漁場は片浦沖、野間池沖合でサバ5割、アジ5割の混獲で小型魚が大部分である。

※瀬魚 / 本釣

薩南海区出漁の小型船は1航海(7~10日航海)で、500~2,000Kgの水揚をなしている。漁場は七島近海の各管根であるが、本月は台風などの影響で好漁がなかった。

※小型延縄

種子島東岸~都井岬沖の小型延縄は1航海(3日操業使用釣数平均280~300本)キハダ10~15尾、バセウカジキ5~6尾で1,000Kg程度の水揚であるが本月は時化などの影響で出漁日数が低下している。

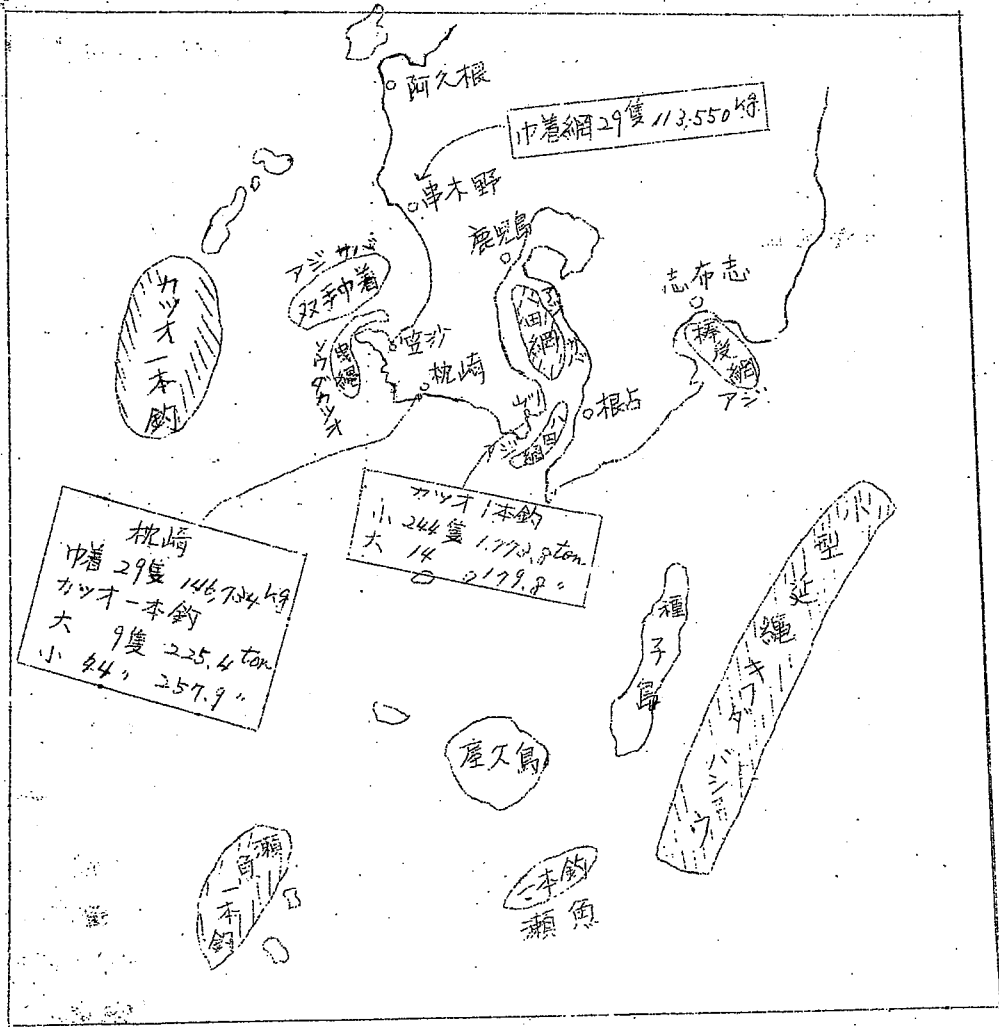
※棒受網

志布志湾の棒受網は未だ本格的漁期にはなっていないが1統/夜300~500Kgの漁獲である。

※その他の漁況

薩摩半島南西岸の曳縄はソウダカツオ対象に操業し、かなりの漁獲をあげている。鹿児島湾の八田網はアジ、サバを漁獲しアジはFL15~18cm、サバはFL20~23cmの小型魚で湾中央部の岸寄りが漁場となっている。内之浦定置網は小アジ、ムロを主として1日600~750Kgの水揚であり例年よりアジの漁獲が良好である。

7 月 漁 場 図



※ 双手巾着網

主なる漁場は、片浦、野間岬沖合でサバ、アジの漁があった。枕崎入港船調査では出漁日数10日延有漁統数86統、総漁獲量51,000 Kg (サバ48.6%、マアジ24.2% 他のアジ17%) で前月よりやや下廻っている。又、串木野入港船は延有漁統数47統 256,565 Kg (アジ28%、サバ21%、ウルメ38.5%、ハガツオ4.6%、ソーダカツオ7%) となつている。

※ シイラ竿曳き

前月薩摩半島南西部一帯で活況を呈したハガツオは双手巾着で若干漁獲される程度で8月に入つてシイラ竿曳きが異常な活況をみせている。総体的な数量は不明であるが、8月中旬の最盛期には片浦港に1日7,500 Kgを水揚し下旬1屯級の船で1日500~600 Kgをあげており殆んど連日6,000 Kg前後を水揚しているもよう。一方佐多岬沖合一帯でもシイラの漁獲が目立ち、1本釣、曳縄等でかなりの漁をみている。

※ 小型旋網

薩摩半島万世一帯で操業されるカタクチ小型旋網は例年4月下旬~10月下旬は休漁しているが今年は8月26日2,400 Kg (製品) をあげ、その後連日1統当100~200 Kgの水揚をみており今後の漁獲増加を期待している。

鹿児島湾内の漁況

※ 八田網

例年7、8月には湾中央部でのカツオ餌料カタクチが大

量に漁獲されるのであるが、今年は7月以降湾中央部でのカタクチは皆無で大半湾奥部に限られ漁況もおもわしくない。一方湾中央部岸よりではマアジの漁獲が著しく目立ち1日/統2,000~3,750 Kgの水揚げであった。

又湾口部ではカツオ餌料に適せぬ大型カタクチ(B、L、12~1700)が1日/統1,800 Kg前後の漁獲をしている。

※バセウカジキ刺網

7~9月にかけて湾口部岸より一帯でバセウカジキが漁獲されるが、1隻(1~2 屯)1日多い時で15本(1本25~35 Kg)で平均4本程度の漁獲をあげ漁獲日には鹿児島市市場には50~100本が入荷し活況を呈している。

※志布志湾の漁況

志布志湾では定置網、棒受網、八田網によつて、主としてアジが漁獲されている。

定置網	18 統	1日平均アジが主で	7,500 Kg
棒受網	10 統	出漁日数	19日
		1日	4,500~5,200 Kg
八田網	4 統 (東串良)	19日間出漁	
		1統/日平均	小アジ 500 Kg
	4 統 (志布志)	15日間出漁	
		1統/日平均	小アジ 1,200 Kg

6月、7月のマグロ延縄漁況

漁業部

6月

前月に引続きキハダの漁獲が目立っている。

キハダは $22^{\circ}\sim 26^{\circ}\text{N}$ 、 $130^{\circ}\sim 135^{\circ}\text{E}$ 附近、 $20^{\circ}\sim 22^{\circ}\text{N}$ 、 $136^{\circ}\sim 137^{\circ}\text{E}$ 附近及び喜界島 E 附近に好漁がみられており全魚種中主位を占め 31.1% （尾数）となつている。

全魚種を通じての釣獲率は5月の 1.15 を少し下廻り、 1.01 を示している。

7月

6月は入港船少なく（調査隻数 34 ）であつたが7月に入ると更に減少し（調査隻数 10 ）閑散であつた。

7月の漁場は、沖縄南東海域（ $20^{\circ}\sim 25^{\circ}\text{N}$ 、 $130^{\circ}\sim 140^{\circ}\text{E}$ ）と小型船（生き餌—アジ—使用）のみが操業している種子島近海だけである。マグロ・カジキ計釣獲率は沖縄南東海域で $0.19\sim 1.67$ 、種子島近海で 2.02 を示す。キハダは種子島東方で 1.26 、沖縄南東海域で $0.10\sim 1.04$ で比較的低い。キハダの6月全漁場平均は 0.32 、7月ば凡そ2倍の 0.70 となつている。全魚種を通じては 1.37

魚体及び魚種組成

キハダについて見ると別図のとおり。6月は 35Kg にモードを持つ群が主で7月は（種子島東方海域の資料だけで 3 隻 $9/$ 尾のみ）やゝ大型。

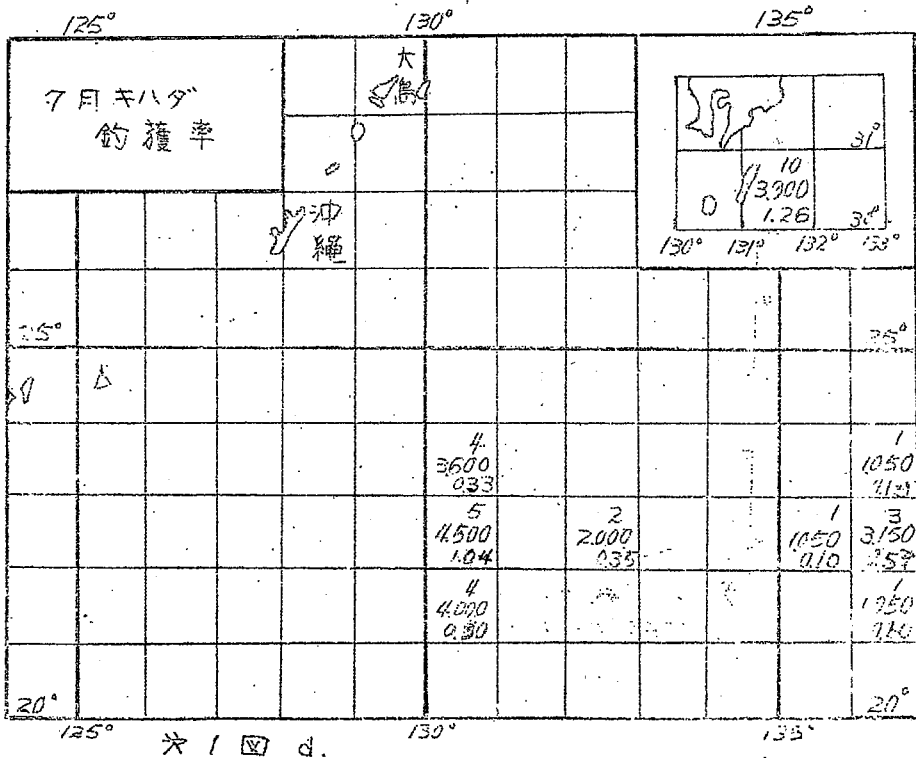
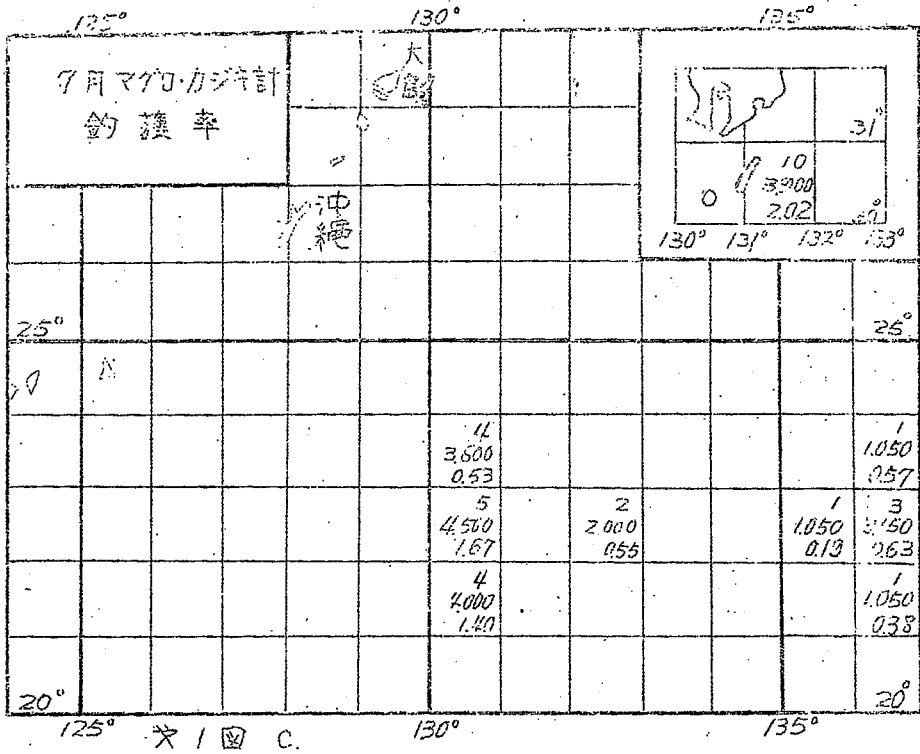
魚種組成は、6、7月とも5月に続きキハダが主位を占め、クロカジキ、バシヨウカジキの漁獲がやゝ目立っている。

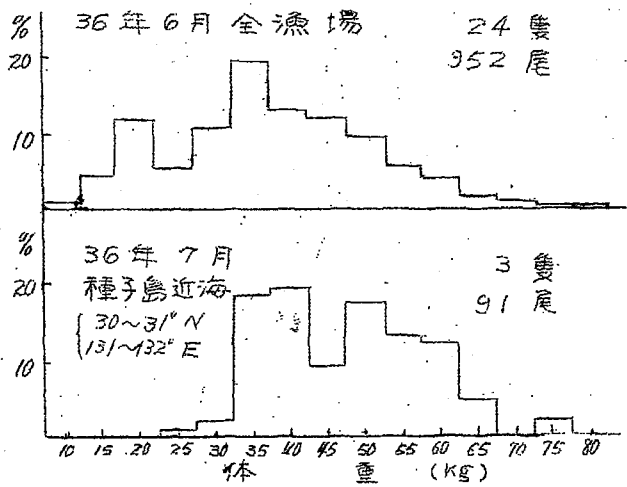
125°		130°				135°			
6月マコカヅキ計 釣獲率			大 島	2	1				
			3	7	15	5			
上段 魚類	中・総使用釣数	以下同	3000	5880	15040	5240			
下: 釣獲率			0.90	0.55	0.80	0.36			
		沖 縄	2 2000 0.85	6 6000 0.42	10 11160 0.71	1 1080 0.17		1 1100 0.54	25
				5 5480 0.54	1 1200 0.75	4 4800 1.27		9 9500 0.66	4 4000 0.82
			4 4200 0.60	1 1050 0.67	2 2000 0.85	1 1200 0.92	1 1100 0.45	1 1100 1.09	1 1000 1.10
						4 3900 0.56	2 1800 0.83	1 900 0.03	1 1050 0.19
				2 2250 0.84	1 1200 0.83	1 1080 1.57	2 2160 0.97	4 4320 0.89	2 2100 0.19
			2 2400 1.12	9 10200 1.01			1 1080 0.74	1 1050 0.56	2 2100 0.52
			6 6750 1.14	1 1200 0.52					20
125°			130°				135°		20°

※ 1 ⊠ a

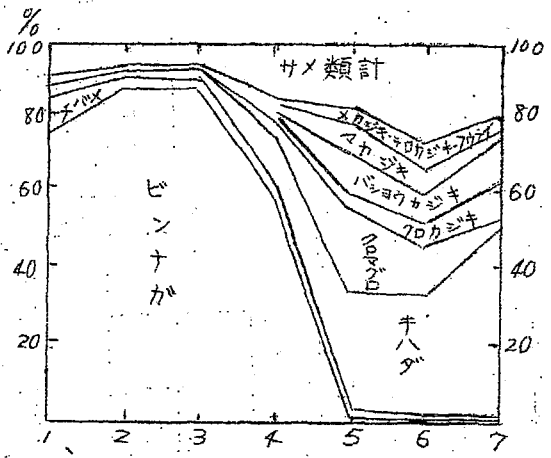
125°		130°				135°			
6月キハダ釣獲率			大 島	2	1				
			3	7	15	5			
			3000	5880	15040	5240			
			0.47	0.26	0.34	0.04			
		沖 縄	2 2000 0.25	6 6000 0.13	10 11160 0.16	1 1080 0.09		1 1100 0.09	25
				5 5480 0.09	1 1200 0.25	4 4800 0.85		9 9500 0.34	4 4000 0.81
			4 4200 0.24	1 1050 0.36	2 2000 0.35	1 1200 0.50	1 1100 0.99	1 1100 0.91	1 1000 0.70
						4 3900 0.20	2 1800 0.39	1 900 0.01	1 1050 0.19
				2 2250 0.84	1 1200 1.48	1 1080 1.23	2 2160 0.23	4 4320 0.12	2 2100 0.05
			2 2400 0.08	9 10200 0.34			1 1080 0.09	1 1050 0.28	2 2100 0.05
			6 6750 0.67	1 1200 0.08					20
125°			130°				135°		20°

※ 1 ⊠ b





文2図 キハダの体重組成



文3図 魚種組成の月変化 (36年1~7月全漁場)

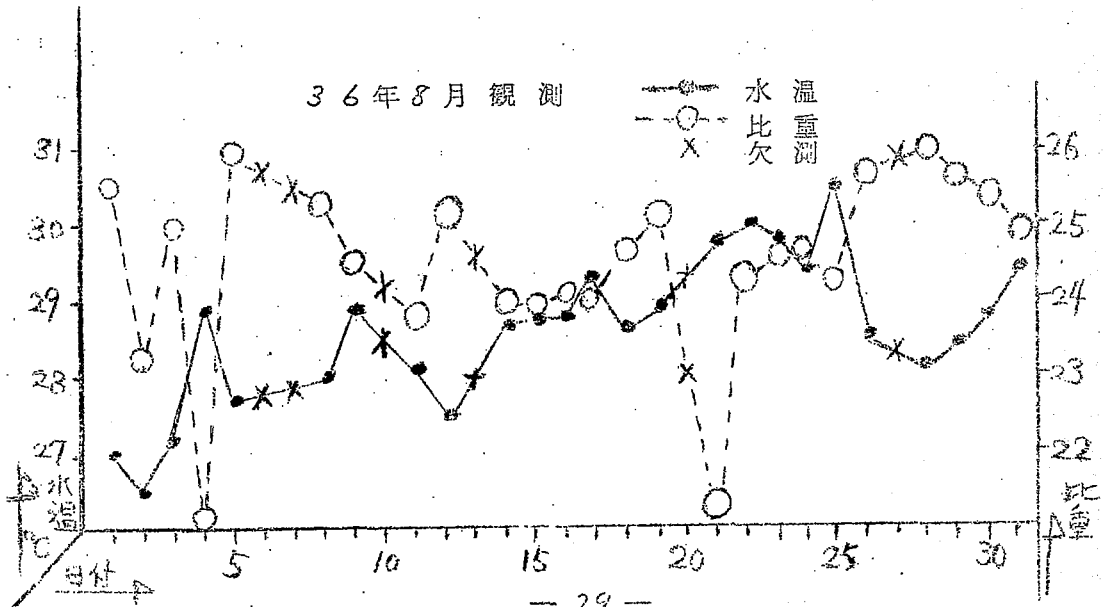
定 置 観 測 (8月分)

養殖部 東 邦 彦

全般的には前月に比して水温、比重ともやゝはげしい変動である。比重が2.1になつた日が2回あるがいずれも晴天であり汚水とも考えられず理由はわからない。

36年8月 旬間平均表

		水 温	換 算 比 重
上	平 均	27.74	24.35
旬	前 旬 差	- 0.58	- 1.37
中	平 均	28.58	24.34
旬	前 旬 差	+ 0.84	- 0.01
下	平 均	29.27	24.66
旬	前 旬 差	+ 0.69	+ 0.32
月	平 均	28.53	24.45
間	前 旬 差	+ 1.13	- 1.31
	最 高	30.5	25.98
	最 低	26.5	21.07



廣 見 島 港 外 定 置 観 測 (昭和56年8月)

日	潮 時	天候	雲量	風向	風力	波高	気温	水温	計算比重
1	10:20	Q	10	SE	3	4	26.4	27.0	25.52
2	11:15	R	10	SE	6	5	26.8	26.5	25.32
3	12:20	Q	9	S	3	2	29.2	27.2	24.96
4	13:30	BC	7	SSE	3	2	30.0	28.9	21.07
5	15:00	BC	8	WSW	2	0	32.2	27.7	25.96
6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	13:50	Q	9	SW	1	0	27.1	28.0	25.27
9	17:20	BC	7	W	2	1	30.6	28.9	24.45
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	8:50	BC	6	S	2	1	30.2	28.1	23.76
12	8:30	Q	9	SSE	3	2	28.8	27.5	25.15
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	8:40	K	2	NNE	2	2	27.6	28.7	23.98
15	9:00	BC	4	NE	3	2	28.0	28.8	23.92
16	10:00	BC	7	NE	3	2	28.4	28.8	24.08
17	10:30	BC	5	NE	0	0	30.7	29.3	24.14
18	11:10	Q	10	SSW	1	0	29.8	28.6	24.67
19	12:00	BC	4	SSE	1	0	31.2	28.9	25.01
20	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	15:50	BC	4	WSW	1	0	32.2	29.8	21.27
22	17:00	Q	9	—	0	0	31.2	30.0	24.29
23	17:30	Q	10	WSW	1	0	29.4	28.8	24.74
24	17:40	BC	3	NE	3	2	29.5	29.4	24.51
25	18:20	Q	9	SSE	2	2	30.3	30.5	24.26
26	9:15	B	2	NE	1	2	28.6	28.5	25.67
27	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28	8:40	BC	6	NE	1	1	28.3	28.1	25.98
29	9:30	B	3	E	0	1	29.3	28.4	25.57
30	10:15	Q	10	NE	0	0	29.3	28.3	25.36
31	11:00	Q	9	NE	1	1	30.2	29.4	24.92

私はこうして普及事業を進めている

笠沙町 在籍普及員 津藤友憲

改良普及員の辞令を受けたのは去年の7月であった。長六形の朱線の枠の中に「水産改良普及技師を命ずる」としてあつた。水産改良技師!! 余りにも早変わりした身分に髪の中が少々じりじりするのを覚えた。笠沙町はもと南薩水産指導所が仁王崎にあつた時代に、昭和28年から30年まで2年間勤務した思い出の地である。当時は各月に実施する高崎鼻から南西に浮ぶ宇治群島を更に60哩延した海上百哩の海洋観測と沖合瀬物ノ本釣及び延縄漁業の調査試験が主で実際南薩沿岸に浮ぶ漁船漁業とは全く縁遠いものであつた。今度は直接この沿岸に住み、この沿岸漁場に働く人達の中に入つて漁村発展のため色々の課題と取り組まねばならないのである。先づ何をすれば良いのか 責任感と同時に一瞬広野に追ばなされた空虚な淋しさゝえ感じた。幸い笠沙町役場水産係長や住民課長は漁村出身であり以前知合の人達で漁村にも良く通じ、何彼れと相談に応じて呉れたことは何より気強く思つた。担当地域は笠沙3漁協に秋目、加世田を合せた5漁協管内で何れも漁村は辺りな場所で悪い道路がつかものである。その内單車も配車された。漁村教育を人間的に経営的に技術的にどの様に進めて行くかと言うことである。先づ漁村の実際を知るためになるべく多くの漁家の人達と話してみることにして浦々を走り廻つた。よく漁村の人達にみることですが、こちらから語りかけると赤い目をぐるつと見上げ「ナイゴツナ」と言わんばかりに半身背を向けた格好で仕事をそのまゝする人にも度々会う。しかし、こう言う形の人程純良な人達が多い様である。話は漁業のことにのみならず農事のことから家族のこと、

鶏や豚のことまで教えたり教えられたり調子を合せていった。帰道単車のスピードを落しながらその日の収穫を考えると淋しいことさえ度々あつた。また或るときは知人に出合ふと車を止めて漁況をきき、又、年長者を尋ねその地方の漁業の変遷等を聞くと言う具合で漸く今では他所者の感じも去つて水産の先生から近所どんに変わりそのため真の漁村の姿もみることができ、その中から色々の問題を引出すことができる。蝸歩ではあるが課や試験場の先、後輩の助言と専門技術員の講習会などの援助により仁王崎と野間池に夫々曳縄とノ本釣の研究クラブも生れ、経営と技術改善に強くふみ出しております。

仁王崎研究会は年令30代を中心にした会員10名、野間池は20代から50代の幅をもつた会員でこの人達は全員出漁日誌と漁業収支の内容を含めた一定の漁業経営記録簿を個々に備え、経営と技術の研究に資しております。

仁王崎振興会はそうだがつお、かつお、しび、ぶり、さわらなど夫々の習性に伴つた曳縄潜行板の振り、深度、縄の長さ、船足等の研究に取組み、本年会員のそうだがつおの漁獲実績は他漁村をはるかにしのいでおります。この漁獲実績については研究討議し原因を究明し後日県技術発表大会に発表されることゝ思います。

また野間池振興会は本年度農山漁村振興事業の対象として小型魚探機の購入割当も決り近海未利用魚礁の開発をめざし今後の活動が期待されます。

なお加世田、秋目地区は笠沙地区に比し若年層の転業転出が著しいため研究クラブの結成こそみないが夫々適地産業に従つて部内関係課及び水産試験場の指導員により加工講習会並びに婦人部研修会等が開催され新しく前進しつつあることは総えて先、後輩諸氏の御支援によるものと深く感謝します。

現在は仕事に希望と興味をもち漁村のノ員として漁村の皆様とあらゆる問題に触れて行く覚悟であります。

☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 大隅地区だより ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

大隅地区 駐在普及員 入枝茂樹

7月7日付で大隅地区改良普及員を命ぜられ何する暇もなく1ヶ月余りがすぎ去つてしまった。

当地区とはどういうことか今まで1度も縁がなく文字どおり生れて初めての土地であり、いさゝか不安な気がしないでもなかつたが、住めば都とやらでポツポツ土地の風習にもなれて来ると案外人情味ゆたかな地区で普及事業もやりがいがあるのではないかと思われる。

オードバイ配属も10月頃になる予定で、本当の活動はその後になると思うが現在では実態調査をしている次第である。

御承知のように普及事業は漁業、増殖、流通、各青壮年、婦人部等の育成指導と広範囲にわたる関係上極めて多忙で且つ困難なことであるが「うしお」にはできるだけ現地のナマの声を送つてみたいと思ひますからよろしく願ひします。いろいろありますが今回は挨拶だけにして失礼します。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ウグイスにはその土地に年中棲みついている留鳥と、季節によつて棲む場所を変える渡り鳥の2種類があることを何かの本で見たことがある。

鹿児島には留鳥と渡り鳥の2種類がいるのだと言うことを聞いたりもしたが、渡り鳥のウグイスが鹿児島にいると言うことは色々疑問をもつていた。(鹿児島の場合渡り鳥は非常に少ないのではないか)

ところが大島に赴任してこゝのウグイスは渡り鳥ばかりであるところからウグイスの渡るということをはつきり認めることが出来た。

即ち大島では秋から冬にかけて山や里でチャツ、チャツと餌をあさつていたヤブウグイスは立春から3月にかけて段段と少なくなり4月になるとウグイスの姿はどこにも見られなくなるし声も聞かれない。これは多分ヒヨドリやガン、カモ等と同じく北の方へ渡つて行くのだらうと思う。土地のその方の通らしい人に聞いて見たところ、大島では昔からウグイスは冬だけいて夏は何処かへ行つてしまうものだとして余りこだわつていない様子であつた。

これに伴つて今一つ面白いことはホトトギスが棲みつかないことである。

これはもつともなことであるが、ウグイスの巢に卵を産む習性のあるホトトギスは大島にウグイスの巢がないことを知つていたのであらう。4～5月の明け方等時々天高くホトトギスの声を聞くことはあるが、これは渡つて行く途中らしく木にとまつたり又低空を飛んでいるホトトギスは一度も見ることがない。

大島では昔から軍艦に「築山ホトトギス初ガツオ」の句も
廻しなかつたところのようである。

私は大島に来て小島で自分の疑問を一つ解決したが
水産の事では未だ一つも疑問が解けたことがない。疑問の
多い水産で一つでもよいから何か判りたいものと思う。

前田 耕作

9月15日大島は台風18号の中心に捲き込まれた。
古仁屋は午前8時より10時に台風眼を中心に前後24時
間この姿なき悪魔の跳梁と戦った。戦後最大(風速7.5 m
以上)超大型(台風圏700キロ以上)超A級(890ミ
リバール)、来襲前の予報に違わずこの悪魔の使いは生々
しい爪跡を残して16日早朝北方へ去つた。

倒れ傾いた家屋、吹き飛ばされた塀、崩れた、打上げ
られた舟、茫然と佇志被災者の苦悩にゆがんだ顔は去る大
火の記憶も未だ消えやらぬだけに痛々しい。

分場においても工場、実験室、試験船の一部に被害を受け
職員の住宅に多少損害があつたが、一同元気に復旧に努め
ている。

9月18日台風後の第1船八坂丸が町民の歓声を浴びて入
港、欠乏した物資は補強され、救援物資は到着、島民の復
旧への意慾は次第に昂つている。

A、I 記

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 製 造 部

※ 8月2日 阿久根市水産加工場 川端氏来場

- 県水産改良普及員 岡田氏来場
- 南星式乾燥機及びミリン干加工について打合せ
- ※ 8月4日 鹿大農学部 西郷教授来場
- 吸湿剤（乾素）について打合せ
- ※ 8月5日 大隅地区水産改良普及員 西氏来場
- ミリン干について打合せ
- ※ 8月7日
- 指宿市役所農林水産課庶務係長田川氏外1名来場
- 新任挨拶及びワカサギ加工について
- ※ 8月8日～10日
- 魚肉ソーセージ製造試験（主原料あじ）
- ※ 8月15日 根占地区水産改良普及員入枝氏来場
- 鮮度保持剤及び抗酸化剤について
- ※ 8月15日 大島分場長 前田氏来場
- 新任挨拶
- ※ 8月18日
- 水産課主催かつを加工委託試験打合会議
- 場長室に於て
- 出席者 水産学部 越地、日高、西元氏
- 水産課 上村、柿木、若松氏
- 水試 場長、谷元、藤田、下窪
- ※ 8月21日 水産改良普及員連絡会議
- 場長室に於て
- 出席者 水産課 堀ノ内、長野、志賀
- 漁政課 別府、重久
- 普及員 福元、西、佐藤、岡田、入枝
- 中間
- 水試 場長 各部長 関係係員
- ※ 8月22日 水産改良普及員 岡田氏来場
- 乾素（吸湿剤）使用によるミリン干製造指導につ

いて打合せ

- ※ 8月23日 上野製菓 川田氏来場
鮮度保持薬 フラスキンについて
- ※ 8月29日 水産課 柿木氏来場
加工指導費配当について
- ※ 8月31日
大口養魚場よりあおさ及び鯉について連絡あり
養魚飼料用あおさ採取について鯉こく加工について
- ※ 9月5日 水産改良普及員 岡田氏来場
しらす乾燥指導について打合せ
- ※ 9月7日～12日 藤田技師大島分場へ
水産加工について打合せ及び乾素剤シラス利用に
よるかつを腹皮の乾燥試験
- ※ 9月12日 鹿大水産学部 是枝氏より
ソーセージ用香料及び小川商店について
- ※ 9月12日 鹿児島市 西俣氏来場
種子島産トコブシ加工法について
- ※ 9月14日 水産改良普及員 岡田氏来場
阿久根地区水産加工講習会についての打合連絡あり
- ※ 9月18日 長瀬産業K、Kより連絡あり
魚肉たんぱく消化酵素バイオフラゼのサンプル来る
- ※ 9月20日 宮崎 吉村薬品K、K 新穂氏来場
川村産業福岡出張所 高木氏来場
抗酸化剤BHT及び魚肉ソルブルについて
- ※ 9月20日～21日 阿久根地区水産加工講習会
本場出席者 谷元技師、木下技補
あじみリン干の砂ぼし法の実習
防腐剤の検討調味液の検討をなす。
- ※ 9月26日 37年度製造部予算計画
製造部室に於て 谷元 藤田 下窪 木下

※ 9月27日 大口養魚場場長 水流氏来場
養魚用内臓飼料について

○ 漁 業 部

※ 照 南 丸

8月11日

船体機関の修理（定期検査）を終え鹿児島へ帰港

8月21日～9月1日

漁況、海況予報調査（東支那海海洋観測）

※ か も め

7月28日～8月2日

第1次集団操業指導（手打釣掛崎沖合の魚礁調査）

8月4日～11日

第2次集団操業指導

8月18日

鹿児島湾内人工魚礁調査

8月19日～27日

第3次集団操業指導

8月31日～9月1日

シイラ曳縄漁業調査

9月7日～8日

無線検査（照南丸とともじ）

9月9日～11日

第4次集団操業指導

9月19日～22日

枕崎沖合人工魚礁調査

※ 魚 体 測 定

8月中 （9日湾内アヂ、10日23日近海サバ）
3回

9月中 （1日21日近海サバ）2回

- ※ 肥後技師外照南丸船員2名は山口県外海水産試験場黒湖丸に便乗（パラオ近海マグロ漁業調査のため）
- ※ 鹿尻島入港船によるマグロ延縄資料を集計製本す（33年34年35年分）
- ※ 全上35年分及び最近における紀南漁海域のマグロ延縄漁況（釣獲率）を印刷、本県マグロ延縄船に配布。

○ 養 殖 部

- ※ ノリ養殖に関すること
いよいよノリ養殖の時期となり準備も本格化していると思いますが、新村技師も指導と試験業務でおおわらわである。

8月30日 与次郎浜の潮間観測

9月8日 喜入 9月19日 串木野

9月26日～27日 出水 9月30日 垂水
それぞれ張込み打合せと糸状体管理指導をなす。

- ※ アケガイ調査

8月11日、30日、9月20日指宿地先で採取調査し、熟度は目下観察中

- ※ ワカメ養殖に関すること

高水温の峠をこし発生体の伸長が目立つ頃となったが、8月7日、22日、9月22日海潟地先で培養中の海水を交換した

8月9日～10日 東町葛輪の培養状況を調査した

- ※ クロチヨガイ人工採苗

過去2ケ年間殻頂が隆起する頃に死滅していた幼生飼育が7月初めから分場で行っていたところこの時期の減耗を免れて始めて付着稚貝がえられて室内での飼育に成功した。付着稚貝数はまだ確認できな

いが、以後の管理を分場にお任せして瀬戸口技師は
9月19日帰庁した。

○ 調 査 部

※ 8月2日

串木野市役所から養鱈場水質汚濁問題で来部

※ 3、4、19、29日

ハマチ成育状況調査（牛根、海瀉、山川）

※ 8月7日 牛根ハマチ蓄養場水質改善打合せ

於 場長室（今井教授、江波助教授、牛根漁協長
出席）

※ 8月9～11日

第1回牛根ハマチ蓄養場酸素補給試験

※ 8月15日 上記試験検討会（於 鹿大江波教室）

※ 8月18日

鹿児島湾内ドラム缶魚礁効果確認調査（かもめ使用）

※ 8月17～18日

第2回牛根ハマチ蓄養場酸素補給試験

※ 8月28日 上記試験検討会（於 場長室）

※ 8月31日 海瀉ハマチ蓄養場水質、潮流観測

※ 9月2日 出水郡東町 前田桜氏とマダコ養成共同
試験について打合せ。

※ 9月14日 ハマチ成育状況調査

牛根 平均 850g 海瀉 平均 500g

約 18,000尾 約 6,000尾

山川 平均 400g

約 1,300尾

※ 9月19日

牛根ハマチ蓄養場酸素補給試験結果検討会
（場長室に鹿大江波助教授出席）

※ 9月19日～22日 枕崎魚礁調査（かもめ使用）

※ 9月25日

県議会水産商工委員県水産商工部長、並びに水産
試験場長、牛根ハマチ蓄養場視察

※ 9月25日～27日

出水市広瀬川及び附近海域水質汚濁調査

※ 9月28日

山川港蓄養ハマチに寄生虫発生、駆除処理

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 分 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 養 殖 係

8月に入りマベ貝人工採苗試験期になつたが、今年から分場実験室内に仮設タンクを設け、前年に引続き量産化を目指して各種試験することになつた。

なお、本年度は本場から、くろちよう貝の人工採苗実験も併施するため瀬戸口技師も来場、くろちよう貝は7月22日から、マベ貝は8月9日から数回の実験を行ない現在これら幼生の飼育中である。何れも実験室における初回の試験に拘らず、順調の成育を続け数百個の附着稚貝得られる見込みである。

○ 製 造 係

8月18日 うに（中瓶）255本を支庁に発送

本年度のうには極めて好評で断るのに苦勞している。

9月8日～10日 乾素利用乾燥試験

本場考察による乾素（しらすと塩）によるむろあじ

かつお腹皮の乾燥試験を藤田技師を迎え共同試験。
乾燥速度、仕上り、共に極めて良く従来の人工乾燥
(熱風)に劣らぬでき映え。特に半乾燥品には有望
と思料される。

○ 漁 業 係

かつお餌料蓄養試験を知ノ浦漁場で2回行う。
きびなご量の大小密度の差の比較による斃死率及び斃
死に及ぼす環境条件の測定(水質)を実施した。斃死
は蓄養35時間前後に最高の率を示すことがわかり斃
死するのは主に後尾部に傷を受けたものに多い。又、
長時間蓄養する場合は1日に1回斃死したものを除去
することが放置するものより2倍強の好結果であつた。
なお蓄養後50時間経つた魚は90%漁船活魚艙に耐
え得ることが判明した。

○ 庶 務 係

9月 8日 住用小学校修学旅行生来場
" 福満部長、藤田水技来場
9月/0日 漁政課 下堂園主事来場
9月/1日 笠利町宇宿小学校修学旅行生来場
" 午前/

9月県会に分場本館新築のことが計上されることに
決定の旨連絡があつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 養 魚 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

- ※7月2日 カシカゑ尾採捕
飼育用水槽を作成、中には石を入れ水道水を常時注水
餌料は昆虫類の活餌、事務室に玉をころがすような深山
の美声続く。
- ※7月5日 場内水田の田植
水田養鯉用試験田
- ※7月8日 北薩養鯉漁業協同組合結成会出席
- ※7月12日 親鯉にイカリ虫(寄生虫)を認めた。
駆除にはダイプレックスを用いた。
- ※7月14日～20日 漏水池の保水状態テスト
14、15、17、18、19号池の5面で適水深を
決めて減水の割合をこの間昼夜行つた。
- ※7月19日 稚鯉水田放養
- ※7月20日 十管池キャンプ村開き
- ※8月1日 台風10号のため十管川が増水して用水取入
口の仮堰堤4ヵ所にわたつて決潰
- ※8月5日～11日 13号池及び25号池棧橋作成
- ※8月13日 平出水木場野開拓団へ養魚(造池)指導
- ※8月14日 稚鯉送別及び13は25号池へ分養
- ※8月15日～16日 場内見学者最高を示す
平日は50～100名位の見学者であるが、この2日
間に400名位の来場者があつた。
- ※8月24日 補修池の漏水箇所判明
表土がわずか栗石から10%余りで、しかも側壁の底
部の栗石の間隙が大きく、水はこゝから流出
- ※8月28日 花火大会及び映画の夕べ
- ※8月31日 キャンプ村閉村

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各種会議の開催について ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

例年行事である全国的な水産関係会議の世話役県に本県関係団体が割当られたので先般来準備中であつたが、来る10月3日水産庁主催の「九州ブロック水産改良普及員研修会」を皮切りに順次10月中に催されることになりました。

※10月3日～6日 水産庁主催

水産業改良普及員九州ブロック研修会

※10月9日～10日 全国漁港協会主催

全国漁港大会

※10月16日～18日 全国内水面漁協組合連合会主催

第34回全国湖沼河川養殖研究会

※10月18日～20日 日本水産学会主催

昭和36年度日本水産学会（秋季大会）

※10月20日～22日 南海区水産研究所主催

南海区水研ブロック会議

※10月23日～25日 九州、山口各県水試主催

ハマチ養殖会議